THE AOBA

本州高山に産する蝶について

今西錦司

I 高山蝶なるものは

高山に産する蝶は、それが悉く高山独特のものに限られてゐない。否、高山独特のものは至つて少いのである。又高山と云ふ中でも山麓と山頂とは産する蝶の種類が自然に異つてゐる。山頂附近にしか飛翔してゐないものにはヤマモンキテフやタカネヒカゲがある。キベリタテハやエルタテハは山頂附近にも居るし、又追分や島々谷にも居る。ヲ・イチモンヂやミヤマシロテフの様に上高地には居るが偃松帯には産せぬものがある。又スヂグロテフやキアゲハの如き全國到處に分布してゐるものが數千尺の高所にも飛んでゐるのを見ることがある。然らばかの高山蝶なる名は如何なる蝶に附いてゐるのであるか。それは高山独特のものに限られてゐる

か、将又数千尺の高所に産する総ての蝶を指すものであるか。

高山独特と云つても、コヒヲドシの如きは北海道へ行けばニルタテハやキベリタテハと共に平野に産し、且之等よりもずつと普通であつて、折角の高山蝶も本州丈にしか通用せぬ事になる。否内地に於いてもコヒヲドシの居る処にはニルタテハやキベリタテハも必ず産する。イボタの花等に群つてゐるコヒヲドシは、一処に多産せないニルタテハよりも遥かに採集し易い。唯後者は分布が比較的低い所に及んでゐる為普通の蝶として扱はれてゐるのである。

同じ上高地に産してもミヤマシロテフは高山蝶とせられ、ヲヽイチモンジは一向注意を払はれてゐない。上高地に産する蝶は多くある。其中高山蝶と云はれてゐるものは幾何あるか、ミヤマシロテフが高山蝶なら外の蝶も高山蝶と云つて差支はないだらう。けれどもミヤマシロテフは他に余り産せぬ為からかく珍重せられるのではないだろうか。之も産地が少ないので採集家の苦心するヲヽイチモンジは、一緒に産してゐながら早く発見せられたベニヒカゲが"クモマ"の名称を得なかつた為に左程有名でないのと同様に、或は古くから知られてゐたので不遇の地位にあるのかもしれない。

併し先に言つた如くコヒヲドシにしてもクモマベニヒカゲにしても高山独特とは云ふことが出来ない。それは北海道や樺太の平地迄も高山と云ひ得ないからである。けれども之等は垂直分布と水平分布の関係上、勢止むを得ざるところである。故に高山蝶なる名が一般的でなくなるにしても高山植物なる語が同じ意味で用ひられてゐる以上は之が当り前なのかも知れない。

又高山蝶なるものが山頂附近に居る蝶のみを云ふとせば、ミヤマシロテフやヲヽイチモンジよりもクジヤクテフやキベリタテハを加へる可きである。それで

は[illegible]又ミヤマカラスアゲハの如き蝶[illegible]。併し如何に

高地に産しても キアゲハ、[illegible]等 高山蝶と云ふ者は無いらしい。

かうなると従来の高山蝶といふものが甚だ曖昧なものになって了ふ。そこには何等定まった條件さへもない様に思はれる。唯習慣なるものが強い力を振ってゐる事だけは慥かである。

余は'ミヤマ'だの'タカネ'だの'クモマ'だのといふ一種の肩書よりも、高山蝶なる名は真に高山の雪線附近にしか産せない蝶——タカネヒカゲの如き——に依って始めて占有さるべきものであると思ふ。

II 高山蝶の種類

現今高山蝶と云はれてゐるのは次の数種である。

1. *Aporia hippia* Brem. et Grey ミヤマシロテフ 又はタカノヘテフとあって高山蝶として有名である。併し上高地、明治温泉、夏沢峠等に産するのであるから、前に言った様に高山蝶と云ふべきものかどうかと思ふ。併し前記の如き本州中信濃の高地にのみ産するから却って信州特産の蝶と云ふべきである（木曽駒には産する？）シナノシロテフなる名はこの点で適してゐる。一体信州等の高山に産する蝶は高山植物の分布と同様に北海道や樺太に産するものが多い。これは気候等が其種の生存に適する為であると同時に食草の分布にも之に似た関係があるからであろう。併し本種が北海道等よりも却って台湾に産するのは面白い事である。其他支那、満州にも分布してゐる。一見スヂグロテフ又はウスバシロテフに似てゐるが、後翅裏面の前縁と基部に橙黄色の斑紋があるので区別し得る。翅の開張は（[illegible]）二寸一分内外。

本邦に産するものは *Var. japonica* Mats と云ふ変種で後翅に太いと

云ふ点で原種と異つてゐる。台湾の方は Var. taiwana Mats. と云ふ。japonica 形に似てゐるが前翅の幅が狭く外縁は一層丸味を有してゐる。

2. *Anthochris cardamines* L. クモマツマキテフ

本種は白馬岳の特産とせられてゐた稀種である。近年北アルプスでは棒小屋乗越で獲られ、南アルプスでは下伊那大鹿村大河原のせりき山麓にも産する事が知れた。外国では支那、満州から欧州アルプスにも産する。大きさは普通のツマキテフと大差がない。前翅の外半が柿色で翅端、外縁(狭く)は黒色、及び横脈上に一黒点がある。翅底は前後翅共に灰色、後翅は裏面に散在する暗緑色の斑紋が透って灰色紋がある様に見える。雌は前翅の柿色を欠く。七月に獲られるも発生期が比較的早い為に一般採集家の注意には上る事が少いのである。

3. *Oeneis jutta* Hb. タカネヒカゲ

タカネヒカゲは日本アルプス中八千尺位の處から上でなければ其影を認め得ない真に高山蝶の逸品である。乗鞍から白馬に至る高山、常念山脈、其の外浅間山、八ツ岳にも産する。八ツ岳産のは色彩が暗色に傾いてゐる。昨年燕から常念に縦走した時は天気が絶好であった為十数頭を獲た。七月下旬に現れ一週間位で又影を止めぬ。常に偃松の中や石礫間に棲息し体を傾けて静止する奇習がある。飛翔中は至って弱い。明治四十三年に至る迄発見せられなかった理由を千野光茂氏は其形態習性が稍蛾に類した点に帰してゐる。本州に産するのは変種で Var. asamana Mats. と云ふ。松村博士に依れば(♀)の原種と異なる處は前翅が細くして第四室に第五室と同様の黒紋を具へ第一及第三室にあるものは同大で微小なることと。

4 *Oeneis yazawai* Mats ヤザワタカネヒカゲ

本種はタカネヒカゲに似たるも異る点は次の如くである。

(1) 前翅稍く外縁の暗色帯は明瞭に廣し。

(2) 眼状紋は四個ありて、第二乃至第三室に位し、更は第三乃至第四室にあるもの大なり。何れも其中に白点を有す。

(3) 後翅の第二室に眼状紋ありて其中に白点あり、第三乃至第六室に各一個の白点あれども余り判然せず。

(4) 前翅裏面の眼状紋は表面のそれに異ならず、中室の外側にある暗色帯は判然し、中室にある波様の暗色紋は判然せず。

(5) 後翅は白くして波様の黒紋を散在し、帯状を成さず。中室の外側に当り

産地は白馬岳で矢沢米三郎氏の採集にかゝる。(新日本千蟲圖解 巻三 700頁参照)

5. *Colias palaeno* L. ヤマモンキテフ

プライヤー氏の紹介に係り久しく浅間山の特産として尊重せられてゐた本種も今では立山、四阿(アヅマヤ)山、常念岳、槍ヶ岳、八ヶ岳、東駒ヶ岳、南伊那等に廣く分布してゐる事が知られた。四五千尺以上七八千尺の山地に産地に産し、モンキテフに似たるも後翅の中室に橙黄の一紋なきことを以て容易に区別する事が出来る。其他の差点—前翅前角の黒紋中に黄斑なきこと、全体稍小形なること等。昨年は常念岳及び槍ヶ岳で飛翔してゐるのを見たが性甚だ活潑なるため捕獲が困難である。満州、欧州アルプス等に産し其分布は甚だ廣い。北海道に産する由なるは疑問である。樺太には変種を産する。

6. *Erebia ligea* L. クモマベニヒカゲ

ベニヒカゲに似たるも形稍大、前後翅の外縁に近く柿色の一帯があり、後翅裏面の柿色帯の内側に白色のアルプス形斑紋を有す。本州産は変種で Var. takanonis Mats. と云ふ。尚樺太に産するものも亦変種で Var. sachalinensis Mats. と云ふ。本州産とは下の如き諸点で異る。

1. 柿色帯が一層淡色で赤褐となる

2. 前翅第四及第五室の黒紋は大、之に反して後翅の黒紋は小となる。

余が上高地で捕獲した一頭は反って後者 Var. sachalinensis に類似した点を有してゐる。次に V. takanonis との差点をあげると、

1. 柿色帯は著しく赤褐色となり、第一室に於いては甚だ小、第二室の黒点は微小となる。

2. 後翅第二室及第三室に於ける柿色帯は赤褐色の眼状紋となれり。

3. 後翅裏面は淡色、第二室より第四室に亘り濃柿色の眼状紋あり。第五室には微小なる赤斑を有し帯状をなす事なし。白色の波状帯は第四室にて終り、巾狭く銀白色、第八脈にて横断せらる。

或は変種かも知れぬ。立山、白馬岳、常念岳、甲斐駒等の高山に七八月頃多産す。ベニヒカゲとは発生期が稍違ふ様である。又針の木の[illegible]沢附近の様な低い所に迄分布してクモマの名を瀆しつゝある。

本種は高野鷹蔵氏が八ヶ岳で採ったのを最初ともいひ、又武田久吉氏が白馬で採集したのが最初であるとも思はれてゐるが、実際は金井[illegible]氏が二十数年前に八ヶ岳より学名不詳のまゝ記載せるが最も最初であると。

7. Vanessa Urticae L. コヒオドシ

ヒオドシテフに似てゐるが形が小なること及び後翅底の大半が黒色であ

るのをいつて、識別する事が出来る。裏面もよく似てゐるが、前翅の中室にある一紋及び外縁に近い大紋は黄色である。

本州では七千尺以上の高山に産す。昨年の如き大天井岳、常念岳、二ノ俣谷にも居つたが、特に槍ヶ岳の玉重峠で十数頭を得た。クジャクテフやキベリタテハが本州では高山にも居るし山麓にも居る。(今年の如きは糸魚川街道に付近にも居た)のに、コヒヲドシの方は決してこんな低地に産せないのは何かの関係があるものであろう。

以上が一般に高山蝶と云はれてゐる種類である。尚信州高山に採集せんとする者は次の蝶種を注意せねばならぬ。(第一章、第二章に記載されたるものを除く)。

III 高山蝶以外の注意すべき種類

ヒメギフテフ *Luehdorfia puziloi* Ersch. はギフテフが信州では伊那に産し、本州に於ける分布も南方に偏して、中國地方から四國にまで及んでゐるのに反し、本種は北信州に多く、又東北地方から北海道に亘つて産する。曾つて中野光茂氏はギフテフの分布は太平洋に沿ふては秩父山系が北方の極限であり、日本海に沿ふては、加賀が極限であると報ぜられた。又矢沢米三郎氏に依れば、両種の分布境界は鳥居峠であるまいかとの事である。

ヤマキテフ *Gonepteryx rhamni* L. は昨年島々谷に数頭発見した。之に類するものにウスイロヤマキテフとスヂボソヤマキテフがある。ウスイロヤマキテフが果して新種なりや否やは後日を待つとして、其♀のヤマキテフの♀と異る處を挙げれば

1. 前翅前角より外縁へかけての割れ方の甚しき事。
2. 後翅が甚だ丸味を帯べる事

3. 色は淡く青味を帯べる事。

之等の差は何れも顕著でない。併し六月に出現（ヤマキテフは五・八両月）する事が注意すべき点だと思はれます。

又スヂボソヤマキテフの差点は

1 前翅は濃色、後翅は淡色なる事

2. 中室紋の円形なる事（ヤマキテフは楕円形）

3. 翅端は遥かに細く突出し、縁紋点の微小なる事。

4 裏面、前翅底半部の黄色ナル事（ヤマキテフにては黄色部外縁に達す）後翅の第八脈は遥かに彎曲し。

スヂボソヤマキテフは比叡山、貴船等にも産す。本年青木湖畔で二頭を獲た。

<u>シータテハ</u> Vanessa c-album L. 信州地方に普通。[illegible]月上旬には秋生が現はれる。余の今年獲たのは夏生であった。Var. hamigera Butl. と云ふ変種が南部では最も普通で原種よりも外縁の凹凸更に一層深く、後翅外縁は廣く天鵞絨様の褐色で其中に五個の黄色紋を具へてゐる。貴船の奥でも稀に獲られる事があり、河次の長野附近ではあまり多く産するそうである。又箕面でも獲られた。（信州産とは多少異ふとの事）。樺太には Var. sachalinensis M. と云ふ大分異った変種がゐる。

<u>オホミスヂ</u> Neptis alwina Brem.，<u>フタスヂテフ</u> N. coenobita Stoll.，<u>ホシミスヂ</u> N. pryeri Butl. 等は普通である。<u>オホイチモンジ</u> Limenitis populi L. は飛騨信濃の二國にのみ産し、北海道でも従来から知られてゐるが多くないと云ふ。

二十八年七月に石も高山六合目で初めて獲られたのに依るが、其後同地方では発見せられず、却て大和也大山が産地として有名である。六月から八月に亘って産す。野平安藝雄氏が大正三年に大山で獲た Z. Nohirae 及び Z. attilia subgrisea Wilem. の両種が倶に本種の雌であった事も最近松村博士に依って確められたので、翅形裏面の斑紋等で attilia と関係深き様に思はれ、其為ミドリシジミ類のものとは思ひもつかず、本邦鱗翅蒐集家として世界第一を誇る Wilemam 氏も又本種を所有せる松村博士と共に雌雄の関係を思ひ浮ばなかった程であった。之全く本種がウラゴマシジミ群とミドリシジミ群の中間に位すべき性質のものである所から誤られたのが、寧ろ系統的関係あるものを表示すとも云ひ得る。(昆虫学雑誌第一巻第一号及第二巻第四号野平氏雑記参照)

ヨシノミドリシジミ Z. orientalis は変化に富み形態の大小、色彩の変化が著しく Z. jezoensis や Z. jozanus に酷似せるものがある。六、七、八月に亘って本州各地に産し、京都附近にも普通である。

ミドリシジミ Z. taxila は本州産を japonica と云ひ北海道産を regina と云ふ。後者は前者に比して国産的に小形で雄前翅表面の光沢がコバルト様の調子を混ずるので一見して区別し得べく、裏面の色も幾分褐色味少なく japonica に比し清澄で同時に何となく寒い感じを与へる。雌の前翅表面には紫色斑周定し、地色のまゝのものを発見しない。前種と共に変化の多いものである(野平安藝雄氏談話による)。期節は他のミドリシジミ類と同じ、前種同様京都にも普通。

メスアカミドリシジミ Z. brilliantina、始め浅間山の産として有

名であったが、本州中部以北には可なり普通に産し北海道にも多い。京都附近では花背峠で七月上旬に数頭採集せられた。又本種が本州の遙か西方に迄分布してゐる事は一昨年七月上旬、大山で獲られたので之を知る事を得。雌雄共後翅裏面第七八脈間に翅基に近く存する一短縦條で他種との区別は容易である。七八月

ウラジロミドリシジミ Z. saphirina. 同地には多くない。一種美麗であるが分布は相當に廣い様である。今迄に知られてゐるのは信州沓掛、塩尻、鳥取、兒島半島等近畿では野平氏が大阪府下妙見山附近で採集せられた。京都では大悲山に産すると云ふ。但、北海道では以前は七月頃栽培植物栗上に比較的普通に見られたるも近年稍減少の傾向があると。期節七八月、其他では ウスイロオナガシジミ Z. Butleri. 従来珍種と見做されて居たが、七八月本州各地(信州、伯州、備州)に産する。又北海道では定山渓地方に七月下旬現はれるも稀であると。

ウラスヂシジミ Z. signata. は本邦中最も珍種として有名で単に目録に依っては北海道特産として該地に普通の様であるが、実は稀であると。併し近年大山に桜谷岩彦氏が、箕面に高田千万喜氏が採集してゐる。其他の産地としては信州、因幡等七月に現る。裏面の斑紋は甚しい変化があって、一個体の同紋を有するは稀であると。

ウラグロシジミ Z. orsedice. 日光、塩原、高羽、岩代、伊勢、大山等にて採集せられてゐるも稀なる様である。北海道には産せぬらしく、本州の各地では七月に獲られる。塩原には六月頃多産すると。

ウラキンシジミ Z. ibara. 従来は本州の各地(信州、越後、下

野、上野、伯耆、岩手等）に稀に発見せられたもので珍種の為、Seitz 氏如きは其特立の種でないかとさへ疑った。併し昨夏は大山で数十頭獲られたと云ふ。余は島々谷で採集した。とねりこまで捕獲し得るより、之が食草だろうと云はれてゐる。期節七八月。

ムモンアカシジミ Z. jonasi. は本州では七八月に主に信州以北に産す。

小灰蝶で注意すべきは已属の外に、

オホルリシジミ Lycaena barine, リブリシジミ L. iburiensis, オホゴマシジミ L. arionides. カラスシジミ Thecla w-album. 等である。ミヤマカラスシジミ T. mera の方がカラスシジミより普通な様である。尾状突起の長いので後者と区別し得。余は今年カラスシジミらしいのを大町で獲た。オホルリシジミはプライヤー氏始めて之を発見し、イブリシジミはフェントン氏が始めて採集した稀種である。オホルリシジミは青森、岩手に少くない。オホゴマシジミは昨年八月始めて信州東又で金井浚治氏が発見したものである。

挵蝶科ではミヤマチャマダラセセリ Thesperia maculata, ミヤマチャバネセセリ Parnara jansonis, タカネキマダラセセリ Pamphila palaemon, 等が特に注意を要す。タカネキマダラセセリは大正四年七月初旬に佐竹正一氏の上高地で発見せるもので、この地方には普通なる様であると。　（完）

八月三日比良山にて採集せる昆虫の目録

HYMENOPTERA. 膜翅目

1. ハバチ一種

2. コクロアナバチ

3. 寄生蜂ノ一種

PIPTERA. 双翅目

4. *Syrphus serarius Wied* ナガヒラタアブ

5. *Baccha maculata Walk* コシボソハナアブ

6. チャイロムシヒキ

7. 〃

（今西錦司採集）